

20014

急性A型大動脈解離術後急性期に生じた malperfusion に対し緊急 TEVAR を施行した1例

¹岸和田徳洲会病院

若林 尚宏¹、東上 震一¹、畔柳 智司¹、薦岡 成年¹、降矢 温一¹、小島 三郎¹

1985年8月1日生【目的】急性A型大動脈解離術後2日目に、再解離による急激な偽腔血栓化・真腔圧排にて乏尿・下肢虚血を認めた為、緊急TEVAR(TXd)を施行、危機を脱した症例を経験したので報告する。【方法】症例は86歳女性。自宅前で倒れているのを発見され当院搬送、CTにて偽腔血栓閉塞型のStanford A型(DeBakey I型)大動脈解離と診断、心タンポナーデも認めた為、緊急手術(hemiarch)を施行した。術後、呼吸・循環動態は安定していたが、2日目に突然の尿量低下・下肢虚血を認めた。CTにて腹部分枝や下肢血流は真腔灌流で保たれていたが、大動脈胸腹部移行部～IMAレベルで偽腔拡大による真腔圧排を認めた。再解離によるmalperfusionと診断し、緊急手術の方針となった。術式はTEVAR(TXd)を選択、deploy後の造影にて良好な真腔径拡大を認めるとともに、下肢血流の改善を確認した。【結果】術後のCTでは良好な真腔拡大・主要分枝灌流を確認、またTEVAR前に遠位弓部以遠で認めていた偽腔血流の消失も認めた。術後に軽度の不全対麻痺を認めたものの、保存的加療にて徐々に改善、またその他特記すべき問題は認めない為、更なるリハビリテーション目的に、術後62日目に転院となった。【結論】近年、主に急性B型大動脈解離 complicated case に対する治療法として注目されているPETTICOAT techniqueは、急性A型大動脈解離の術後にも、その適応が拡大している。本症例は稀なケースと思われるが、急性A型大動脈解離の周術期malperfusionに対する治療法の一つとして、TEVAR(TXd)は有用と思われる。

日時 月 日 (第 日)	セッション		会場		時 分～ 時 分
--------------	-------	--	----	--	----------

受付番号

演題番号